

フェイクニュースー誤情報/偽情報と Mal-information

Mis-information, Dis-information, and Mal-information – Why Information Literacy Matters

小棹理子・高嶋章雄

Riko OZAO・Akio TAKASHIMA

湘北短期大学

Shohoku College

【抄録】「フェイクニュース (fake news)」という言葉が巷間で聞かれるようになって久しいが、多くの人が誤情報(mis-information)と偽情報 (dis-information) と混同して使用している。欧米では「情報障害 (information disorder)」が用語として使用されている。さらに、悪意を持った情報 (mal-information) も存在する。それぞれの特徴と問題点を正しく理解し、事実を識別して扱う事の重要性を議論することによって、情報教育の役割と重要性を提示する。

【キーワード】 フェイクニュース、誤情報、偽情報、悪意のある情報、情報障害、ファクトチェック

1. はじめに

近年「フェイクニュース (fake news)」という言葉が一般的に使用されるようになってきた。グーグル・トレンドによると、2016年9月頃からこの単語の検索数が急激に伸び、それ以降、増減を繰り返しながら2020年3月にピークを迎えていることがわかる[1]。2016年は米国でドナルド・トランプ氏とヒラリー・クリントン氏が競り合った大統領選挙が行われた年で、とくに9月～11月にかけて情報暴露戦が行われている[2]。2020年3月には新型コロナウイルス (COVID19) に関して様々なデマや噂が流布された2019年のフェイクニュースの総括が行われている。近々の「フェイクニュース」としては、ロシアによるウクライナ侵攻に伴い、ゼレンスキー大統領の偽動画が作成された例が記憶に新しい[3]

本稿では、バズワードとなっている「フェイクニュース」が何を意味するのか、用語の整理を行い、今後、情報リテラシー教育の役割について考察したい。

2. 情報障害 (Information Disorder)

2.1 情報障害とは

「フェイクニュース」は、前述のように米国前大統領が使用したことで日本でも知られるようになったが、その定義があいまいであり、多くの人が誤情報(mis-information)と偽情報 (dis-information) (後述) と混同することが多いため、欧米では「情報障害 (information disorder)」が用語として用いられている[4][5]。

「情報障害」には、風刺やパロディ、クリックを誘うような見出し、誤解を招くようなキャプション・図表・統計データの使用などが該当する。また、文脈を無視して共有される本物のコンテンツも含まれる。偽者によるコンテンツ (ジャーナリストの名前やニュースルームのロゴを無関係の人が使用したもの)、操作され捏造されたコンテンツなどもこの範疇である。以上のことから、「フェイクニュース」という用語がイメージさせるものより複雑で危険であることが明らかである[6]。

Fig 1 (C.Wardle と H. Derakhshan[7]) によると、誤情報とは、誤った情報であるが、それを発信している本人が真実だと信じて拡散されている情報である。それに対して偽情報は、同様に誤った情報であり、それを発信している本人がその誤りを知りながらも拡散している情報である、としている。これは意図的な嘘であり、悪意のある行為者によって人々が積極的に情報操作されている可能性があることがわかる (Table 1)。第三のカテゴリーは「悪意のある情報 (mal-information)」とでも呼ばれるもので、事実に基づきながら、個人、組織、または国に損害を与えることを意図して使用される情報である。

2.2 情報障害の具体例

(1) 風刺とパロディ

風刺とパロディは芸術の一種として考えることもできるが、ソーシャルメディアで情報を受け取ることが増えてきた今日、風刺サイトを識別できないことで混乱が生じている。たとえば、カバリスタン・タイムズ (Khabaristan Times) とい

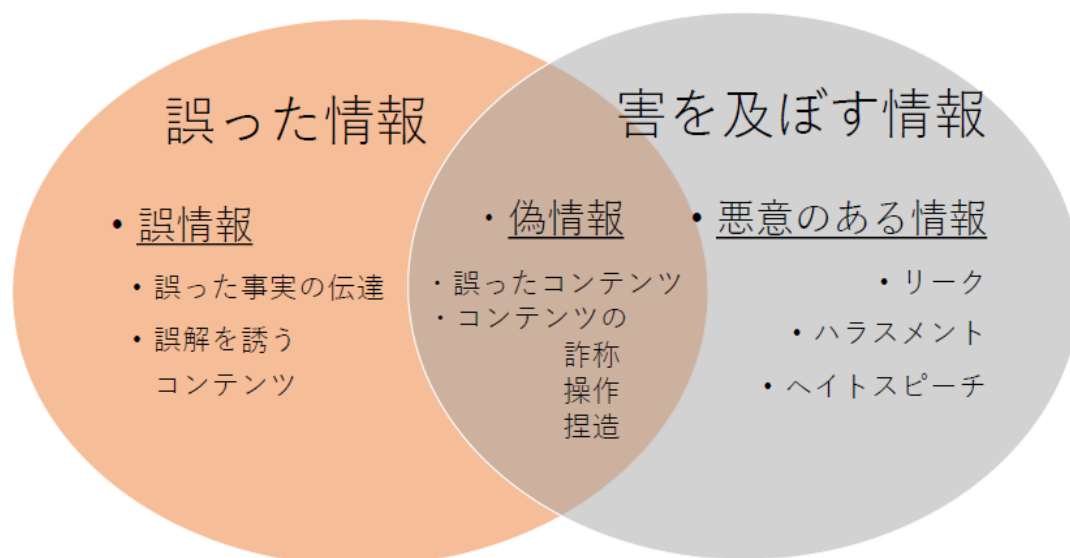


Fig 1 Categories of Information Disorder(情報障害のカテゴリー)[7]

う風刺コラムのサイトがパキスタン・トゥデイ (Pakistan Today) というニュースサイトの一部として立ち上げられたが、2017 年 1 月にパキスタンでブロックされて公開が停止させられた[7].

(2) 紛らわしいコンテンツ

この種類のコンテンツとは、写真の一部だけを切り取ったり、統計や引用文を選択的に示したりすることで、問題や個人を特定の方法で囲い込みを行うような誤解を招く情報の乱用である。これはフレーミング理論 (Framing Theory) と呼ばれている[8]。Rappler.com でいくつかの事例が公開されている[9]。我々の脳が視覚資料に対して批判的になりにくいいため、映像は紛らわしい情報を広めるのにする強力な手段である。記事コンテンツを模倣した「ネイティブ広告」や有料広告も、スポンサーがついていることが十分に認識されていない場合、このカテゴリーに属する。

(3) 間違った関連付

この種類のコンテンツで最も一般的なのは、クリックを誘導するために見出しを悪用すること (クリックベイト) である。受け手の関心を引く競争が激化する中、編集者はクリックを引き付ける見出しを付けなければならなくなり、読者はコンテンツを読んで騙されたと感じることもさえない。また、フェイスブックのようなサイトでも、特定した印象を与えるために映像やキャプションが使われ、テキストの中身に合致しないことがある[8]。とくに、特定の記事をクリックせずにタイムラインに目を通すだけで済ませる場合 (これは良くあることである)、紛らわしい映像やキャプションに騙されやすくなる。

(4) コンテンツの詐称

ジャーナリストが書いていない記事に自分の名前が付けられたり、見たこともない画像や動画に組織のロゴが使われたりすることが、実際に問題になった。たとえば、2017 年のケニア大統領選挙の直前、BBC アフリカは、BBC のロゴと小見出しが合成されたビデオが WhatsApp で流れていたことを発見された[10]。そのため、BBC は人々がこの捏造されたビデオに騙されないよう、警告する動画を制作し、ソーシャルメディアで共有することとなった。

(5) コンテンツの捏造

このタイプのコンテンツは、完璧に捏造されたニュースサイトのようなテキスト形式の場合がある。たとえば、「WTOE5 News」という、空想ニュースサイトで、教皇がアメリカ大統領候補としてドナルド・トランプ氏を推薦したという内容の、完全に捏造された記事が発信された。また、コンテンツの捏造は視覚資料の形式をもつ場合もある。たとえば、SMS を通じてヒラリー・クリントンに投票することができるという不正確な内容を示唆する画像が製作された例がある[11]。これら画像は、アメリカの大統領選挙に先立ってソーシャルネットワークでマイノリティコミュニティをターゲットにして拡散されたものであった。

(6) 偽文脈

フェイクニュースという用語が役に立たない理由の一つは、本物のコンテンツが本来の文脈から外れた状態で再流通されることがしばしばあるからである。たとえば、2007 年にベトナムで撮られた写真が、それから 7 年後の 2015 年に、ネパールで起こった地震直後の写真のように偽

造されて出回ったことがある[12]。

(7) コンテンツの操作

騙す目的で本物のコンテンツを操作することに該当する。一つの事例として、南アフリカ共和国で、ハフィントン・ポストの総編集長であるフェリアル・ハファジー（Ferial Haffajee）が実業家のヨハン・ルパート（Johan Rupert）の膝のうえに座っているという、個人関係を示唆するような写真が出回った例があった[13]。

Table 1 誤情報と偽情報の具体例

情報障害の種類	内容
風刺とパロディ	害を及ぼす意図はないが、視聴者を騙す可能性あり
紛らわしいコンテンツ	イシューや個人にフレーム付けするために誤解を招くように情報を使う
間違った関連付	見出し、視覚情報、キャプションなどが中身とかけ離れている
コンテンツ詐称	本当の情報源が偽装される
コンテンツ捏造	騙すために 100% 偽りのコンテンツを作成する
偽文脈	コンテンツが虚偽の文脈で発信される
コンテンツ操作	オリジナルの情報や画像が騙すために操作されている

2.3 情報障害の段階と要素

上記定義に基づいた情報障害には三つの段階、創作、制作、そして拡散（Fig 2）があるということの理解も重要である。「情報障害」の異なる段階にそれぞれの要素が存在するからである[7]。コンテンツを創作するエージェントは、制作したエージェントと拡散者と異なる場合が多い。

ローマ法王がアメリカ大統領候補者のドナルド・トランプを支持したという WTOE5 News というサイトで掲載されたデマは、情報障害が生じる段階を検討する上で有名な事例である（Fig. 3）[14]。

3. 情報障害への対応

3.1 ソーシャルネットワークの危険性

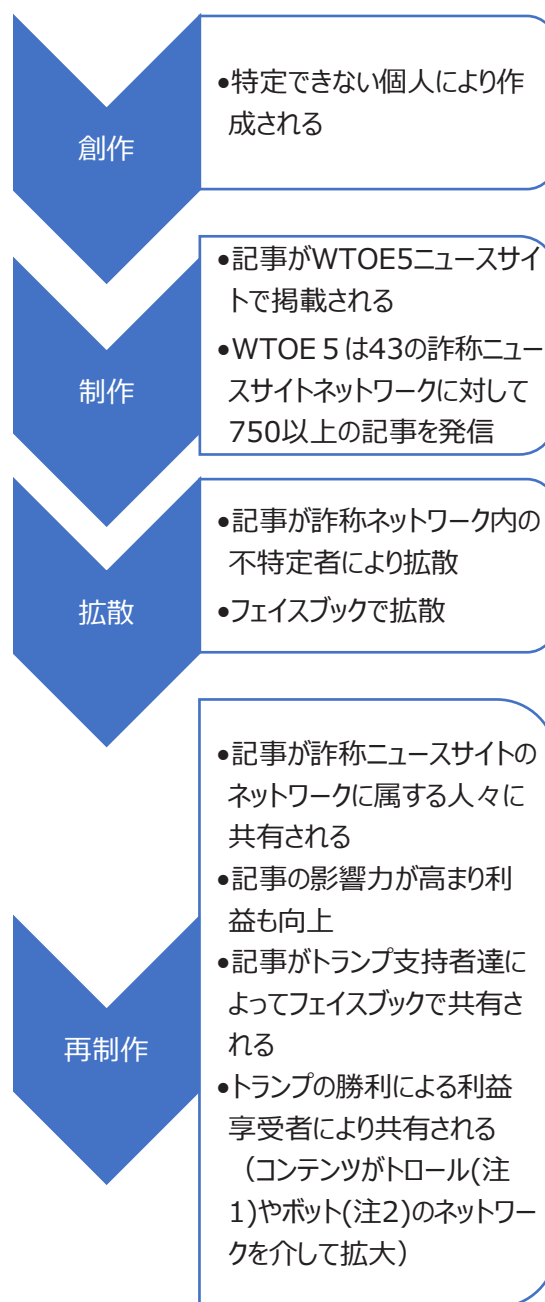


Fig 2 情報障害の段階の例[7]

注 1：インターネット上の”荒らし”。低報酬で具体的な投稿を変える人々

注 2：プログラムされた自動投稿

エージェント	主体のタイプ: 組織の段階: 動機の種類: 自動化の段階: 狙っている受け手: 害する意図: 誤解させる意図:	公式的／非公式的 無し／ゆるい／タイト／ネットワーク型 経済的／政治的／社会的／心理的 人間／サイボーグ／ロボット 会員／社会集団／社会全体 有／無 有／無
メッセージ	長さ: 正確性: 合法性: 詐称タイプ: ターゲット:	長期的／短期的／イベントごと 誤解を招く／操作する／捏造する 合法／違法 無し／ブランド／個人 個人／組織／社会集団／社会全体
解釈者	メッセージの解釈: 行動類型:	順応的（ヘゲモニー的）／対抗的／交渉的 無視／支持して共有／反対して共有



Fig 3 「情報障害」の要素と段階[14]

上述のように、情報障害の大きな要素としてソーシャルネットワークが関与しており、とくに映像コンテンツの影響が大きい。ソーシャル・プラットフォームにアップロードされる映像コンテンツ（写真、動画、GIF）の量が急速に増加しているのは、主に次の3つの要因が考えられる。

- ・世界中でカメラ付きスマートフォンやフィーチャーフォンが普及したこと。
- ・安価な（場所によっては無料の）モバイルデータへのアクセスが増加したこと。
- ・誰でもコンテンツを公開し、視聴者を呼べるグローバルなソーシャルネットワーキングのプラットフォームが台頭したこと。

ビデオ画像を活用した情報障害に巻き込まれないようにするためには、次のガイドラインが有効であろう[7]。

- ・懐疑的な見方で編集する
- ・精度についてのチェックリストをつける
- ・予断を持たない・本当だと思いたいことにつながる手がかりを自分に都合よく使うという誘惑に負けない
- ・匿名の情報源には注意する

3.2 ファクトチェック

前述の状況を踏まえ、「ファクトチェック」を行うことの重要性が増している。「ファクトチェック」は、報道の確実性を確かめ、事実や数字を再確認し、報道機関によるコンテンツの全体的な品質管理の役割を果たしてきた。現代ジャーナリズムの台頭とともに実践され、この始まりは、タイム誌（TIME）など1920年代の米国の大手雑誌でのファクトチェックであるとされている[15]。米デューク大学のDuke Reporters' Labによると、2017年12月に世界の5カ国で137のファクトチェック・プロジェクトが活動していると報告されている[20]。もっともファクトチェックが盛んにおこなわれているのは米国であるが、日本でもファクトチェックイニシアティブ(FIJ)が活動を行っている¹。そのサイトではファクトチェックを「公開された言説のうち、客観的に検証可能な事実について言及した事項に限定して真実性・正確性を検証し、その結果を発表する営み」と定義している。

ファクトチェックは一般的に、次の3段階からなっている：

- (1) ファクトチェック可能な主張の発見

¹ <https://fij.info/>

議会の会議録やメディアの記事、ソーシャルメディアなどを基本とする。この過程では、重要な公的な主張の中で(a)ファクトチェック可能なもの、及び(b)ファクトチェックすべきもの、についての判断も行う。

(2) 事実の発見

対象は公的な主張の裏付けとなる入手可能な最も質の良い事実である。

(3) 記録の訂正

多くの場合、真実性の尺度を用い、主張をエビデンスに照らして行われる。

ファクトチェックを行う際に気をつけなければならない点がある。下記はその例である。

・「ポスト真実」という考え方。政治やメディアの激しい二極化・身びいき化のため市民が受け入れ難い事実をあからさまに拒絶する傾向にある[16][17]。

・人々は皆、新しい事実的情報の受け入れを妨げ得る認知的その他のバイアス、言うなれば本質的にこころの中の障害物、を持っている。「確証バイアス」とは、情報を処理する際に、自分の今もっている信念に一致するものを集める、または自分の今もっている信念に基づいて解釈する傾向のことである。こうした偏った意思決定を行っていることを人々は意識しておらず、しばしば情報の矛盾を無視してしまう。もともともっていた信念は、ある場面に関する期待や特定の結果の推測につながることもある。人間は情報の重要性や自分への関連性が高まれば、特に自分の信念を支持するような情報処理をしがちである[18][19]。

4. 情報リテラシー教育の重要性

情報社会になって久しいが、ICT が発展し日常生活にも IoT が導入されるようになり、安価なモバイル環境下で AI 技術も活用された画像や動画が日常的に入手・処理・発信できる状況になっている。

大学の基礎的な教育科目である「情報リテラシー」では、基本理論、マナーや情報倫理の知識の習得や PC/ソフトウェアスキルの向上、問題発見と解決の方法論の獲得を目的としている。しかし、コロナ禍やロシアによるウクライナ侵攻、米国の大統領選挙など、情報戦が日常的に行われるようになった今日、「フェイクニュース」というバズワードに惑わされることなく誤情報、偽情報、悪意のある情報を個人が識別し、正しく判断し行動することが求められている。

この課題に対する答えはなかなか簡単には得られないが、少なくとも、得られた情報を鵜呑みにするのではなく、ファクトチェックを行うこと

によって可能な限り客観的に検証可能な事実については真実性・正確性を検証し、その結果に基づいて自己の判断をくだすようにすべきではないかと思われる。

引用文献

- [1] <https://trends.google.com/trends/explore?date=to%20day%205-y&q=fake%20news> (閲覧日 2023 年 1 月 6 日)
- [2] <https://www.asahi.com/international/us-election/2016/> (閲覧日 2023 年 1 月 6 日)
- [3] Yahoo! ニュース【解説】年末総括 2023 年も「フェイク情報」に注意 “ウクライナ侵攻” から学ぶ(2022 年 12 月 30 日配信)
<https://news.yahoo.co.jp/articles/e9d27aba0a9d48bb780803b32be2733d7a7d5d8e>
- [4] Wardle, C.: “Information Disorder: the essential glossary”. Shorenstein Center, Harvard University. https://firstdraftnews.org/wp-content/uploads/2018/07/infoDisorder_glossary.pdf?x25702 (2018) (閲覧日 2022 年 3 月 18 日) .
- [5] Posetti, J & Matthews, A : ‘information disorder’ - from Cleopatra’s era to the present - in a guide published by the International Center for Journalists (ICFJ): [https://www.icfj.org/news/short-guide-history-fake-news-and-disinformation-new-icfj-learning-module\(2018\)](https://www.icfj.org/news/short-guide-history-fake-news-and-disinformation-new-icfj-learning-module(2018)).(閲覧日 2022 年 3 月 18 日)
- [6] Claire Wardle and Hossein Derakhshan : Thinking About ‘Information Disorder’: Formats of Misinformation, Disinformation, and Mal-information, Journalism, 'Fake News' and Disinformation: A Handbook for Journalism Education and Training(Module2), <https://en.unesco.org/fightfakenews> (閲覧日 2022 年 3 月 8 日)
- [7] Claire Wardle and Hossein Derakhshan : “Information Disorder”(revised ed.) Council of Europe (2018) <https://rm.coe.int/information-disorder-report-version-august-2018/16808c9c77>.(閲覧日 2023 年 1 月 9 日)

- [8] Entman, R., Matthes, J. and Pellicano, L. (2009). Nature, sources, and effects of news framing. In: K. Wahl-Jorgensen and T. Hanitzsch (Contributor), ed., *Handbook of Journalism studies*. New York: Routledge, pp.196-211.
<https://centreforjournalism.co.uk/sites/default/files/richardpendry/Handbook%20of%20Journalism%20Studies.pdf> (閲覧日 2023 年 1 月 9 日)
- [9] Punongbayan, J. (2017). Has change really come? Misleading graphs and how to spot them. Rappler.com.
<https://www.rappler.com/thought-leaders/20177731-duterte-change-fake-news-graphs-spot> (閲覧日 2023 年 1 月 9 日)
- [10] BBC (2017). Kenya election: Fake CNN and BBC news reports circulate.
<http://www.bbc.co.uk/news/world-africa-40762796> (閲覧日 2023 年 1 月 10 日)
- [11] Haltiwanger, J. (2016). Trump Trolls Tell Hillary Clinton Supporters They Can Vote Via Text. Elite Daily.
<https://www.elitedaily.com/news/politics/trump-trolls-hillary-clinton-voting-text-message/1680338> (閲覧日 2023 年 1 月 10 日)
- [12] Pham, N. (2018). Haunting 'Nepal quake victims photo' from Vietnam. BBC.
<http://www.bbc.co.uk/news/world-asia-32579598> <https://www.rappler.com/thought-leaders/20177731-duterte-change-fake-news-graphs-spot> (閲覧日 2023 年 1 月 10 日)
- [13] Haffajee, F. (2017). Ferial Haffajee: The Gupta fake news factory and me. HuffPost South Africa. https://www.huffingtonpost.co.za/2017/06/05/ferial-haffajee-the-gupta-fake-news-factory-and-me_a_22126282/ (閲覧日 2023 年 1 月 10 日)
- [14] WTOE 5News (2016). Pope Francis shocks world, endorses Donald Trump for President, releases statement.
<https://web.archive.org/web/20161115024211/http://wtoe5news.com/us-election/pope-francis-shocks-world-endorses-donald-trump-for-president-releases-statement/> (閲覧日 2023 年 1 月 10 日)
- [15] Scriber, B. (2016). Who decides what's true in politics? A history of the rise of political fact-checking.
<https://www.poynter.org/news/who-decides-whats-true-politics-history-rise-political-fact-checking> (閲覧日 2023 年 1 月 10 日)
- [16] Wood, T. & Porter, E. (2016). The Elusive Backfire Effect: Mass Attitudes' Steadfast Factual Adherence (August 5, 2016).
<https://ssrn.com/abstract=2819073>;
- [17] Nyhan, B. & Zeitzoff, T. (2018). Fighting the Past: Perceptions of Control, Historical Misperceptions, and Corrective Information in the Israeli Palestinian Conflict.
<http://onlinelibrary.wiley.com/doi/10.1111/pops.12449/abstract>.
- [18] Encyclopedia Britannica —
<https://www.britannica.com/topic/confirmation-bias>
- [19] From Discover Magazine —
<http://blogs.discovermagazine.com/intersection/2011/05/05/what-is-motivated-reasoning-how-does-it-work-dan-kahananswers/#.WfHr14ZrzBI>
- [20] Stencel, M. (2017). Fact-checking booms as numbers grow by 20 percent. Duke Reporters Lab. <https://reporterslab.org/big-year-fact-checking-not-new-u-s-fact-checkers/>

Mis-information, Dis-information, and Mal-information – Why Information Literacy Matters

Riko OZAO

【Abstract】 There have been many uses of the term ‘fake news’ to describe different types of information disorder, i.e., mis-information, dis-information and mal-information. The paper summarizes the recent studies on information disorder, and discusses on the importance of teaching information literacy based on fact check, so that the individuals can acquire true information for decision making.

【Keywords】 Information Disorder, Fake News, Dis-information, Mis-information, Mal-information, fact check